

囗の話


原因は縦書きより横書きが多くなったせいかもしれません。あるいは漢字でサンズイの文字が多いせいかもしれません。私の知人でもう三十路を越えた人がいまだ「ツ」を書けないのです。

「ツ」は第1画目の点を打ったあと、第2画目の点を右側に打ちます。その人はそれをついつい第1画目の下に打ってしまうのです。「それでは『シ』ではないか」とたしなめると、その人は言います。「最後まで見てよ。これは『ツ』だよ」と。


その人の書いた文字は「シ」、つまり第3画目は左上から右下へ書いています。「シ」は右下から左上にはねるだろ。もうギャフンです。

仮名を書くときこう書けということは文部科学省の学習指導要領にはありません。だからこんなツの字を書く人が増加していくと「シ = ツ」を認めるしかないのかもしれませんが。読むほうはとても面倒くさいのですがね。

で、この話はここにとどまりません。

世に常用漢字という文字集合があります。この集合の中に「囗」があります。この字の3から5画目は明らかに「ツ」です。「囗」は教育漢字でもありますから、学校では「ツ」と書くように教えているはずです。なぜ「ツ」と書くようにしているかという、常用漢字表の前身である当用漢字表の字体表ではと書かれているからです。これでは絶対に「シ」には見えません。

教育関係者、特に出版関係者の間では当用漢字字体表は絶対的基準です（文部科学省・文化庁では必ずしもそうっていないのですが）。

ですが、最近を認めるべきではないかという考え方が出てきたようです。それも教育の現場です。画数は合っているし、「シ = ツ」とすれば問題ない。画一的な書き方を子供に強要するいままでの教育方法では子供がますます漢字に対して興味を失ってしまう。だから許容する幅の中に収めるべきであるというらしいのです。ひょっとするとこの先生方ご自身も普段「ツ」と書けず「シ」と書いているのでは？

全国どこでも間違いなく読ませるために、字形を画一的にし、当用字体表に照らして、画線が長い・はねている・止めるべきところを交差しているとか、筆を勢いを無視したきわ

めて幾何学的国語教育がされていたことは事実です。だから子供が漢字を嫌いになったともいえます。この点においては字形の揺らぎ（包摂）を認めようとする先生方の考え方はあらたな展開として賛美すべきことです。

でももう少し考えてください。昭和 24 年に当用漢字で、また昭和 58 年に JIS で、こんな対応の仕方が失敗に導くこと証明してます。

「囗=囗」を認めることは「ツ=シ」を認めること、ひいては「ツ=シ」を、「サンズイ」を「ツ」と書いても許容することになるのです。個人の情実から決して安易に許すべきことではないのですよ。そうなったときに誰が責任を取るのですか。

「囗は間違いで囗がただしい、絶対に囗と書かなければならない、今回は許してやるしかし、今後は許さない。」こんな厳格さがあって初めて許される許容であると思います。

子供がかawaiiそうだからなんて自己満足な、子供を見下したような僭越さでできる判断ではないと思います。むしろ「囗」を「圖」と書いてしまった児童を許容してあげるべきと思うのです。

日本の国語問題は深いのですよ。とつても狭い地域社会の中で云々できることではありません。